



## ミシェル・フーコーと統治

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前川, 真行 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006028">https://doi.org/10.24729/00006028</a>

ミシェル・フーコーと統治<sup>1)</sup>

前川 真行

## 1. 屈折

権力はどのように作用するのか。政治学と同じほど古いこの問いを、フーコーは歴史、とりわけさまざまな制度の歴史との交点において提出する。『古典主義時代における狂気の歴史』<sup>2)</sup>において、この主題は、「人間」をふたつの集団に切り分けること、正常な人間をそうでないものから切り分ける行為とともに現れていた。このときフーコーの視線は、ときに「排除」と呼ばれる切断の作用によって、この正常な領域の外に押しやられ、あるいはその縁をさまよう人びとに注がれている。狂人と犯罪者を結節点に、さまざまな法制度あるいは知識の体系が構成され、正常とされた人びとの生活へと折り返される。言語と知は、狂気をどのように包囲し、刑罰は犯罪者をどのように拘束し、そしてどのように無力化し、ときにふたたびそれを社会へと送り届けるのか。市民はいかにして市民となるのか。『狂気の歴史』の第三部から『監視と処罰』<sup>3)</sup>へと至るこれらの研究のなかで、一般施療院を舞台に、狂気が貧困を介して犯罪と結びついたとき、規律訓練という主題が舞台の前景に現れる。

感染をなくすために身体を治療しなければならないとき、肉体を罰することは適切な処置である。……しかも肉体を罰するだけでなく、それを試練にかけて痛めつけ、そこに苦痛の跡が残るのを恐れぬことが適切な処置なのである<sup>4)</sup>。

肉はその受動性を通じて、そこに開いた傷口を通じて、「権力」を導き入れる。主体とは、この場合、この肉に重ね合わされた権力によって構成されるなにもものかとなる。だが、権力の

<sup>1)</sup> 本稿はある出版社の求めに応じて2010年の夏に書かれたものであるが、本稿を含む論考は版元の都合により今日まで未公刊のままである。いくつかの論文でこの論考について言及したため、時折問い合わせが寄せられていたが、いっぼうで執筆からすでに7年が経過し、執筆時点以降に発表された関連研究に対応するには大幅な改稿が必要となっている。そのためここにその原稿をオリジナル・バージョンとして発表し、いくつかの問い合わせに対応することにした。ただし今回本稿を発表にあたり、もともとの原稿に含まれていたこの問題についての研究動向の解説に当たる部分を削除し、また今日までに邦訳が公刊されたものについてはその書名を付記した。ただし訳文については、文脈を損なわないようにするために執筆時のままとしてある。そのため、いくつかの基本文献については注で付記したが、サーベイとしては不完全なものとなっていることに留意していただきたい。この問題は当該書籍の出版のさいに対応したい。

<sup>2)</sup> M. Foucault, *Histoire de la folie à l'âge classique*, Paris, Gallimard, 1972, p. 119 [M. フーコー (田村俣訳) 『狂気の歴史——古典主義時代における』新潮社, 1975, p. 103].

<sup>3)</sup> M. Foucault, *Surveiller et punir, naissance de la prison*, Paris, Gallimard [M. フーコー (田村俣訳) 『監獄の誕生』新潮社, 1977].

<sup>4)</sup> M. Foucault, *Histoire ... .op. cit.*, p. 119 [邦訳, p. 103].

抑圧と主体の抵抗という物語をそこに見ることは果たして適切であったのだろうか。自律とは、このとき、二重化された力の重ね合わせによって成立するものであり、その限りでそれを従属と呼んだとしても、そこに矛盾はない。主体とはみずからの肉に重ね合わされた権力である。権力なるものが、屈曲し、変形した果てに個々の肉に刻み込まれ、痕跡を残すものであるのならば、反作用、あるいは抵抗という比喩を用いるべきだったのかどうか。その方向がどこを向けばそれが作用となり、反作用となるのか。おそらくそれゆえにフーコーは新たな言語を用いて語り直す必要があったのだ。それゆえに統治という言葉が必要となったのだ。

## 2. 統治

フーコー自身がその使用を最後までためらい続けた統治性 (*gouvernementalité*) についての分析は、事実上、統治術 (*arts de gouverner*) の系譜を辿る営みであった (一定の限界を踏まえるという条件のもと、そのかぎりでは、フーコーによるこの造語に統治思想という日本語を当てることが容認されるのではないかと筆者は考える)<sup>5)</sup>。ここで「統治」と訳したこの言葉はフランス語の *gouvernement* である。現在では、執行権力を表すものとして、「政府」を指す使い方が、もっともありふれたものであろう。とはいえそうした用法は、一説によるとルソー以降のこと、すなわち18世紀も半ば以降のことにすぎないとされる<sup>6)</sup>。法の制定と権力の「純粹な」行使との機能的な区別が、そもそも政治的な意味を持つようになるには、それなりの規模を有する整備された行政機構がじっさいに必要とされる時期を待つ必要がある。たしかにそれ以前は、いやルソーにおいてもほとんどの場合、政治権力の行使を記述するにあたって、こうした機能的な分割にはそれほど考慮が払われてはいない。むしろより重大かつ具体的な問題であったのは、今日われわれが主権の名前で表現する、最終的な意思決定の権限と様態に関する問いであった。ひとつはそれが誰の手に委ねられているのかというものである。つまりフランスは、ヴェネチアは、あるいはローマは、どのようなタイプの「政体」なのか、つまり主権者は、君主なのか、貴族あるいは市民の一部なのか、それとも市民の全体なのか。そしてもうひとつは、権力の行使が、なんらかのルールに従うものか、それとも専断に委ねられていたのか。つまりその政治体は、共和政あるいは君主政なのか、それとも専制や寡頭制、あるいは端的に<sup>アナルシー</sup>無秩序状態にあるのか。

もっとも、王権の制限を意図した混合政体論が、共和政と同一視され、なおかつその機能的な整理がプロト立憲主義とでも呼ぶべき様相を呈したとき、ポコックに倣い、そこに近代的な意味での「政府」という概念の萌芽を見ることも不可能ではなからう<sup>7)</sup>。しかしそれにしても、

<sup>5)</sup> この統治術については、M. Senellart, *Les arts de gouverner — Du regimen médiéval au concept de gouvernement*, Paris, Seuil, 1995.

<sup>6)</sup> E. Derathé, *Jean-Jacque Rousseau et la Science politique de son temps*, 2é éd. Paris, Vrin, 1970 [E. ドラテ (西嶋法友訳) 『ルソーとその時代の政治学』九州大学出版会、1986]。ドラテは、この書物の用語解説でエスマンに依拠してそのように主張しているが、残念ながら邦訳はその部分が省略されている。M. Esmein, *Élément de droit constitutionnel français et comparé*, 4e éd., Paris, 1906.

<sup>7)</sup> ポコックによる興味深い分析を参照せよ。J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment — Florentine Political*

そのビジョンの具現化には、三政体と具体的な政治集団でもあった諸身分、諸団体との結びつきが弱まる必要があった。そしてまさにそれこそがルソーが行った作業であり、シエースとフランス革命が実行に移したものであったのだ。

ただし、すでに述べたように、このグヴェルヌマンという言葉をもっぱら狭義の政治権力の形態の問題に還元することは適切ではない。それは個体にも適用されることもあれば、さらには人間ではなく、財産にたいしても用いられるものでもあった。

### 3. 司牧的統治

そもそも、このグヴェルヌマンという言葉にたいして、政体ではなく、統治というより抽象的、あるいはその機能に着目した訳語が選択されるとき、そこにはこの言葉の持つ多義性をより強調したいという意図が現れている。冒頭部分で、いくらか曖昧に「個体に折り返される」と表現したことからも示唆されるように、たとえばルソーが『エミール』のなかで、家庭教師を指して導き手グヴェルヌールと呼ぶさいに見られるたぐいのものである<sup>8)</sup>。統治という言葉のこうした用法は、ラテン語の*regimen*（教導、身体統治、節制などの日本語が当てられようか……）という言葉の系譜に直接連なるものであり、キリスト教西洋の思想伝統においては、ことさらに奇をてらった表現でもない<sup>9)</sup>。ルソーが、この技術について船を沈めることなく導くための航海術として語っているように、当時の文脈においてそれは「君主の鑑」という文芸の伝統に連なるものでもあった<sup>10)</sup>。いやさらにその歴史を遡らせてみれば、地中海東岸を中心とした世界、つまり聖書世界に広がる牧畜という文化をひとつの参照点とした集団の統治技法へとわれわれはたどり着く。あるいはフーコーに倣ってそれを司牧的統治と呼ぶこともできよう。この技術の特徴として、群れを誘導するために、しばしば去勢された雄羊が羊飼いの代理として用いられることは興味深い。というのも群を形成する動物である羊の家畜化にあたっては、ほとんどの雄は大人になるまえに間引きされ、食肉として利用されるのであるが、なかに一匹だけ、牧者に成り代わり、羊の群を先導するための雄が選ばれる。その個体は去勢を受け、雌をめぐる争いに勝利するために必要な暴力性を抑制され、文字通り牧者と生活を共にし、牧者の分身となって、群の先頭に立つ。牧畜とは都市へ乳製品と食肉を供給する産業である。つまり群れの「振る舞いの制御」とそのための先導羊への去勢と訓育という技術は、家産としての群れを、その健康を維持しつつ増大させる技術の延長線上にあるものなのだ。いかにもフーコー好みの主題といえよう。この司牧的統治という技術には、肉の拘束を通じた生殖と欲望のコントロールに

---

*Thought and the Atlantic Republican Tradition*, New Jersey, Princeton University Press, 1975. ch. IX. [J. G. A. ポーコック（田中秀夫・奥田敬・森岡邦泰訳）『マキャヴェリアン・モーメントーフィレンツェの共和主義と大西洋圏の共和主義の伝統』名古屋大学出版会, 2008, 第9章].

<sup>8)</sup> J.-J. Rousseau, *Émile ou de l'Éducation*, 1762 (in *Œuvres complètes*, tom. IV, Paris, Gallimard, 1969) [ルソー、樋口謹一訳『エミール（上・中・下）』白水社, 1986].

<sup>9)</sup> M. Senellart, *op. cit.*, pp. 22-31.

<sup>10)</sup> 君主鑑については、とりあえずF. マイネッケの有名な書物（F. Meineck, *Die Idee der Staatsräson in der neuen Geschichte*, 1924 ; 3e éd. Munich, R. Oldenbourg, 1965 [マイネッケ（菊盛英夫・生松敬三訳）『近代史における国家理性の理念』みすず書房1976]）を（後述）。

よって、群れの飼育とその人口を管理するという統治思想のエッセンスが含まれており、この技術が人間に転用されたさい、それがまとう形態を予告するものとなっている<sup>11)</sup>。

とはいえ、この先導羊にたいする訓育と群れの飼育というふたつの技法が、狭義の政治的性格を獲得するには、長い時間を必要とする。その媒介として決定的な役割を果たすことになるのが、キリスト教文学における魂の教導 [= 統治] という主題である。グレゴリウス・マグヌス（教皇グレゴリウス一世）によって「諸術のなかの術」とされるこの倫理的指針は、すでにその二世紀前、司牧の営みを「魂の医者」であると定義したナジアンゾスのグレゴリオスの影響のもとに成立したものである<sup>12)</sup>。すでにフーコーは『異常者たち』のなかでも、統治術 (*art de gouverner*) を子供、狂人、貧民と並んで魂をその対象とするものとしている<sup>13)</sup>。魂はここで一種の家畜として扱われ、つまりは家政の<sup>エコノミー</sup>対象となるのだ。そしてこのエコノミーが王国という政治世界へと重ね合わされ、この魂の教導が王という形象のもとで上演されるならば、それは教会と国家、信仰世界と世俗の世界とをつなぐ結節点となるだろう。「君主の鑑」はその意味でひとつの到達点となる。世俗世界における代理人たる君主への助言を通じてなされる魂の教導は、王国における個体と群れとの統治に政治的性格を付与する決定的な一歩となるだろう（それゆえに世俗化というテーマがここで顔をのぞかせることはなんら不思議ではない）。こうして司牧的統治は、ひとつの政治思想として固有の性格を発展させてゆく。

#### 4. 国家理性論そしてポリス学

だが、この「君主の鑑」というジャンルにたいしては、その重要性に見合った関心がつねに払われてきたわけではなかった。すなわち政治思想史上におけるマキャヴェリの「近代的」性格が強調されるかぎりにおいて、いわばその前史の地位に押し込められる傾向があったからである。政治についての考察を巡らせること、権力のメカニズムとその効果について、合理的な計算を働かせること。政治が独立した領域として科学の対象となるには、来世における救済という中世的枠組みから離脱し、世俗の価値観の内側で自律した領域を形成する必要があるがあった。じっさい『近代史における国家理性の理念』におけるマイネッケにとって、たとえそれが生命の大量廃棄という狂気に結実するものではあったにせよ、マキャヴェリそして国家理性による切断こそが、歴史主義の成立に向けた、つまりは世俗的近代国民国家成立に向けた決定的な一歩を記すものであったように<sup>14)</sup>。

<sup>11)</sup> たいへん残念なことにフーコーは、この先導羊が去勢雄であったという谷が指摘した興味深い論点を見落としている。谷泰『神・人・牧畜——牧畜文化と聖書世界』平凡社、1997。

<sup>12)</sup> Grégoire de Nazianze, *Discours*, p. 110-111, スネラルによる引用 (M. Senellart, *op. cit.*, p. 27)。

<sup>13)</sup> M. Foucault, *Les Anormaux – Cours au Collège de France. 1974 - 1975*, Paris, Gallimard-Le Seuil, 1999 [フーコー (慎改康之訳) 『異常者たち——コレージュド・フランス講義1974-1975年度』筑摩書房2002]。

<sup>14)</sup> F. Meineck, *op. cit.* マイネッケのこうした解釈にたいしては異論も多い。たとえばG. Post, « *Ratio publicae utilitatis, ratio status and « reason of State », 1100-1300* », in *Studies in Mediaeval Legal Thought, Public Law and State*, New Jersey, Princeton University Press, 1964. は、その中世的性格を強調している。またフーコーは、マキャヴェリにおける「国家」概念の不在を指摘している。いずれの論点についても、Ernest Kantorowicz, *Kings Two Bodies – A Study in Mediaeval Political Theology*, New Jersey, Princeton University

こうした歴史理解に立つかぎり、マキャヴェリの理念を実現したとも言えるリシユリュ、そしてガブリエル・ノーデが定式化したクー・デタ概念が、特権的な地位を獲得することを理解することはたやすい。カール・シュミットによる再定式化によって有名になったこの概念は、中世的世界観に片足を残した自然法思想に立脚する法的理性にたいし、世俗的な賢慮に基づく政治的理性（あるいはシュミットの場合であれば決断の行動主義というべきか）を優先するという点で、フーコーの統治概念と共通する点があるかのようにもみえる<sup>15)</sup>

だが、たしかに一度はマキャヴェリの近代性を強調したフーコーも、78年以降、はっきりとこの人物を政治思想における中世的枠組みの末端へと位置づけ直していることはあらためて強調しておいてもいいだろう<sup>16)</sup>。「国家理性」の「マキャヴェリズム」的性格に着目するマイネツケとは異なり、フーコーが「国家理性」という問題枠組みにおいて重視するのは、イタリアを中心とした反マキャヴェリ的な国家理性論であり、さらには17世紀（ドイツ）官房学、とりわけポリツァイ・ヴィッセンシャフト（ポリス学）である。ノーデ、マイネツケ、シュミットのいずれも、これらにたいして低い評価しか与えていない。だが、いくらか不適切に「行政学」とも訳されることもあったこの思想は、古典的な、政体選択としての統治形態の問題とも、また、マキャヴェリそのひとでさえも、その影響を免れることはなかった、政治権力の使用の正当化を巡る問題枠組みとも異質なものであるとフーコーは考えている。彼のこうした立場は、近代政治思想における新ストア主義の重要性を強調したゲルハルト・エストライヒのそれと思いのほか近い。つまりここでは、ポリスという統治思想は、誰が権力を掌握しているのかというその起源を問題にする立場（主権論）にたいして、どのように権力が行使されるかという統治術の系譜を引くものとして捉えかえされる。たしかにそこには看過できぬ切断が存在するとはいえ、この（反マキャヴェリ的）国家理性、あるいはポリスの思想とは、それが統治の術であるというかぎりにおいて、司牧的統治の近代における再編であったといえよう。

---

Press, 1957 [エルネスト・カントーロヴィチ（小林公訳）『王の二つの身体——中世政治神学研究』平凡社, 1992] を参照のこと。

<sup>15)</sup> Carl Schmitt, *Die Diktatur*, Berlin, Duncker & Humblot, 1921, [シュミット（田中浩・原田 武雄訳）『独裁——近代主権論の起源からプロレタリア階級闘争まで』未来社]。G. Naudé, *Bibliographie politique, contenant la méthode pour étudier la Politique*, Paris, 1642 および G. Naudé, *Considérations politiques sur les Coups d'État*, Paris, 1667.

<sup>16)</sup> まさにこの変化が『知への意志』（M. Foucault, *Histoire de la sexualité I – Volonté de savoir*, Paris, Gallimard, 1976 [フーコー（渡辺守章訳）『性の歴史 I 知への意志』] p. 128）あるいは『社会は防衛しなければならない』（M. Foucault, « *Il faut défendre la société – Cours au Collège de France, 1975-1976*, Paris, Gallimard-Seuil, 1997 [フーコー（石田英敬・小野正嗣訳）『ミシェル・フーコー講義 集成 6 社会は防衛しなければならない——コレージュ・ド・フランス講義 1975-76』筑摩書房 2007] などまで続く闘争モデルから『安全・領土・人口』以降の統治モデルへの重視という変化なのである。M. Foucault, *Sécurité, Territoire, et Population – Cours au Collège de France. 1977-78*, Paris, Gallimard-Seuil [フーコー（高桑和己訳）『ミシェル・フーコー講義集成 7 安全・領土・人口——コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978年度』筑摩書房 2007]。主権と統治とのいささか拙速な峻別はこの点にかんしては問題をむしろ混乱させている。この点については M. Senellart, *Les Arts de gouverner, op. cit.* また著者によれば、フーコーそしてスネラルとは独立になされた仕事 A. Boureau, *La Religion de l'État. La construction de la République étatique dans le discours théologique de l'Occident médiéval (1250-1350) La Raison scolastique I*, Paris, Les Belles Lettres, 2006 を参照。

現在、警察という行政組織を指す「ポリス」という言葉が18世紀以前にカバーしていた対象領域は、なるほど福祉国家の成立以降に行政と呼ばれる活動の大部分をカバーする。ただし、それが念頭に置いている空間的な広がりも、もっぱら都市およびその通商の及ぶ範囲であることには注意が必要である。それは、とりわけペストを直接のきっかけとした14世紀中葉の封建社会の転換以降、ゆっくりとしかし着実に活力を取り戻してゆくヨーロッパにおいて、農村から人間と物資、そして貨幣を吸収し成長してゆく都市における集団の制御が、質的な変化を要請し始めたことに対応するものである。すなわち、ポリスという概念のもとで具体的に扱われることになるのは、伝染病や都市の清掃といった医療衛生問題から、犯罪や賭博さらには売春や物乞い、浮浪行為といった風紀（習俗）や道徳および信仰に関わる問題であり、それは今日、都市生活という言葉で連想されるあらゆる側面に及ぶ<sup>17)</sup>。すでにエストライヒ自身が社会的調整（Sozialregulierung, social regulation）という言葉を用いて分析しようとしたこのプロセスは、今日のわれわれの感覚からすれば、「社会的なもの」と呼ばれる問題圏に属するものであり、やはり都市化と工業化をそのきっかけをした19世紀における社会問題の先駆的な形態と呼ぶことのできるものである。これは都市に集住した住民の生命を安全に守り、その「生活（life, vie, Leben）」をどのようにコントロールするか、つまりは人口集団（population）をどのように統治するかという問題である<sup>18)</sup>。ポリスという統治思想には、すでに集団の統治（人口学／統計学）についての、こういってよければ近代的な思想配置が含まれている<sup>19)</sup>。

フーコーがこの都市という空間のなかに、政治と経済、公的生活と私生活を截然と分けることのできない新たな空間を見だし、立法過程よりは、法の適用と解釈とがいつそう差し迫った問題となるこの領域に、さまざまな意図や装置、あるいは諸制度の編成の枠組みの変容を見たことは興味深い<sup>20)</sup>。（ひとつにはこの思考体系が、領土への囲い込み（領土化）というベクトルを強くもつものであることを示している。）ただ、規律権力の成立と発展を重視し、近代国家の母胎としての軍事官僚機構（そして重商主義）の成立を強調するエストライヒにたいし、

---

<sup>17)</sup> たとえばA. Farge, *La Vie fragile : Violence, pouvoirs, et solidarité à Paris, au XVIIIe siècle*, Paris, Hachette, 1986など。日本語で読めるものとしては、フーコー自身の著作を除くとB. Geremek, *La Potence ou la pitié — L'Europe et les pauvres du Moyen Âge à nos jours*, Paris, Gallimard, 1987 [ゲレメク（早坂真理訳）『憐れみと縛り首——ヨーロッパ史のなかの貧民』平凡社, 1993]、また高澤紀恵『近世パリに生きる——ソシアビリテと秩序』岩波書店, 2008など。

<sup>18)</sup> いくらか言葉遊びめくが、マイネッケにとっては生命（の活力）こそが国家を形成し展開させる動因であったのにたいして、フーコーにおいては、「生活」は、いわば客体として、国家の成立と発展のもとで徹底的な再編を被るものとされる。

<sup>19)</sup> G. Oestreich, *Geist und Gestalt des frühmodernen Staates*, Berlin, Duncker & Humblot, 1969。とりわけ同書に収録されている論文« Strukturprobleme des europäischen Absolutismus »を参照。この書には本人の校閲済みである英語版（G. Oestreich, *Neostoicism and the early modern state*, New York, Cambridge University Press, 1982）そして日本語版が存在するが、後者（G. エストライヒ、（坂口修平、千葉徳夫、山内進訳）『近代国家の覚醒——新ストア主義・身分制・ポリツァイ——』創文社, 1993）は、訳者らによる独自編集版であり、「Strukturproblem ...」の邦訳（G. エストライヒ（坂口修平・平城照介訳）「ヨーロッパ絶対主義の構造に関する諸問題」）は、F. ハルトウング、R. フィーアハウスほか著（成瀬治編訳）『伝統社会と近代国家』岩波書店, 1982に収められている。

<sup>20)</sup> M. Foucault, *Sécurité, Territoire et Population*, op. cit. [フーコー『安全・領土・人口』前掲]。

同じような認識を共有しつつもフーコーの視線はポリス学のもうひとつの側面へと注がれる。彼がここで重視しているものは、とりわけ18世紀において大きな問題となる飢饉すなわち穀物の安定供給を巡る問題圏だからである<sup>21)</sup>。ここには、すでに述べたような統治形態の選択という問題設定からの離脱に加え、個体の統制にかんする、エストライヒとはまた別の興味関心が現れている。つまり問われるべき問題は、物流と人口の流動を調整しているのは、どのようなタイプの統治なのかということである。もはやそれは統治形態がどのようなものかという問題設定にはいかなる意味でも属していない。このあらたなテクノロジーの性格を、フーコーが統治思想 *gouvernementalité* という造語を用いて思考しようとしたのは、こうした分析枠組の変更を意識してのことであろう。そしてさまざまな行政機構が、じょじょにその比重を増大させつつその流通に介入するとき、われわれはこの統治技法に対応する、新たな認識も成立することを知っている。これは領土から離脱した人口と物との流動から、いかに力を引き出すかという別様の思考体系に属するものである。それが政治経済学である。こういってよければフーコーにとって近代とは、政治学の成立ではなく、むしろ政治経済学の成立にあるといえる。ちなみにフーコーは、レジメン (*regimen*) という言葉は、ナジアンゾスのグレゴリウスが、あるところで用いたオイコノミアという言葉に対応するものであると考えていた<sup>22)</sup>。そこには、たんなる言葉の一致以上のものが見いだされている。

## 5. 政治経済学

イングランド、スコットランドでは17世紀、フランスにおいてもおそらくは18世紀の段階において、富は自由な財の流通からもたらされるものとなる。すでに都市という消費地域において、その安全は<sup>セキユリテ</sup>パンの安定供給、すなわち穀物の流通が政治秩序の安定に依拠するものであった<sup>23)</sup>。さらに、それが貧民の統治であり、伝染病の統治であるかぎり、このポリスという統治技法は、社会体の流通局面をいかに円滑に機能させるかという立場からの再編が避けがたいものとなる。いやこの自由主義<sup>リベラリズム</sup>を中心として、統治思想のあり方が徹底的な再編を被るというべきであろう<sup>24)</sup>。富（物財）と人（人口）の安定は保存ではなく、流通によって担保されるものとなる。関税（穀物条例）から、労働市場の自由化に至る一連の論争に現れているのは、こうした統治思想の変容である。神学のなかでじょじょにしかし着々と準備されていたこの変容

<sup>21)</sup> 都市における食糧問題をめぐっては、S. L. Kaplan, *Le meilleur pain du monde — Les boulangers de Paris au XVIIIe siècle*, Paris, Fayard, 1996を参照。

<sup>22)</sup> ただしそう解釈するには、この講義録の編者が指摘するように、いくつかの補助線が必要である。Foucault, *Sécurité, Territoire et Population*, op. cit., p. 196 [フーコー『安全・領土・人口』前掲, p. 238] のスネラルの解説を参照。

<sup>23)</sup> 穀物流通にかんしてはS. L. Kaplan, *Le pain, le peuple et le Roi — La bataille du libéralisme sous Louis XV*, Paris, Perrin, 1986。

<sup>24)</sup> J. G. A. Pocock, op. cit. ch. XIV [ポーコック前掲書、第14章]、A. O. Hirschman, *The Passion and the Interests. Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*, New Jersey, Princeton University Press, 1977 [ハーシュマン（佐々木毅・旦祐介訳）『情念の政治経済学』法政大学出版会, 1985]。またP. Rosanvallon, *Le Capitalisme utopique*, Paris, Seuil, 1981 [ロザンヴァロン（長谷俊雄訳）『ユートピア的資本主義——市場思想から見た近代』国文社, 1990]などを参照せよ。



の過程は、すでに16世紀、ヴェネチアのジオヴァンニ・ボテロによって書かれた反マキャヴェリ的のマニフェスト『国家理性論』において決定的な切断となって現れていた<sup>25)</sup>。やはりまたノーデやマイネッケによって低い評価しか与えられてこなかったこの人物が、大枠において重商主義的発想の強い制約の下にありつつも、国家の維持と拡大とを「人びとのインダストリー（創意・勤勉）と多くの工芸」に見るとき、あるいはまた、個体の欲求を一般利益とはもはや矛盾するものとは見なさないというそのかぎりにおいて、すでに国家理性という思想配置のなかに、こうした転倒をもたらす要素が懐胎されていたのだと考えることもできる。とはいえ決定的な展開はイングランド、そしてスコットランドにおいて展開された政治経済学的发展であろう<sup>26)</sup>。

政治経済学は、市場の発見、そして（それが世俗化の決定的段階を画するかぎり）国民国家の成立とともに誕生し、発展してゆく知の体系である。それが、むき出しの暴力であれ、あるいは立法行為（と強制力の組み合わせ）であれ、人びとの欲望と運動とを直接的に統御するというポリス学のモデルは、政治経済学という統治思想にとって、新たな社会の編成原理として、もはや適切とは見なしがたいものとなった。重商主義にその典型を見ることになるポリスの知性は、あまりに統治を追求しすぎ、結果として円滑な流通を阻害するからだ。その意味で市場の「見えざる手」は、立法者としての王の例外的知性を、その限界を知ることにより切り詰めるという点で、ベンタムの視線の遍在装置の対極に立つものとなる。政治経済学の掲げる自由主義は一般の利益、全体の合目的性の追求という枠内において、まさにそのためにこそ、政治権力の介入を制限し、その内側から統治思想を新たに編成し直す試みとなる。自由とは、この場合、何らかの帰属に基づいて法的権利として国家によって作り出されるものというよりは、新たな国家理性がそれに従って構成される計算の前提なのであり、それゆえにこの自由こそが過剰な統治＝政府からの保護の対象となるのである。統治が目指すものは不動の安定ではなく、個人の自由のもたらす流動性によって、全体の合目的性を維持するために、国家理性の限界を画定し、その自由をどのように構成すべきかということになる。スミスの自由は、統治的理性にたいする内部からのカント的批判となるだろう<sup>27)</sup>。政治経済学は、絶対王政＝重商主義＝独占というポリスの理性にたいする内部からの浸食であり、そのかぎりではわれわれはここに福祉国家批判という時代の精神を見ることが出来る<sup>28)</sup>。

ただし、ここでフーコーが描き出そうと試みているのは、統治形態の変化ではなく、統治技

---

<sup>25)</sup> ボテロについてはM. Senellart, *Machiavélisme et raison d'État*, Paris, Presses Universitaires de France, 1989によるコンパクトかつ明快な解説を参照。

<sup>26)</sup> Pocock, *op. cit.*

<sup>27)</sup> いくらか性急な歩みで進められた『生政治の誕生』と題された講義録を参照のことM. Foucault, *Naissance de la biopolitique – Cours au Collège de France. 1978-1979*, Paris, Gallimard-Seuil, 2004[フーコー(慎改康之訳)『ミシェル・フーコー講義集成8 生政治の誕生 コレージュ・ド・フランス講義1978-79』筑摩書房2008]。またすでに挙げた、ポコック、ハーシュマン、ロザンヴァロンらの著作を参照せよ。

<sup>28)</sup> 実際、統治思想を主題としたコレージュ・ド・フランスのふたつ講義は、ちょうど77年から79年にかけて行われている。すなわちヨーロッパ（そしてアメリカにおいては）オイルショック後の低成長を受けたいわゆる「福祉国家の危機」と呼ばれた状況のもとで、つまりいわゆるレーガン、サッチャー（そ

法の変容であったことに注意しなければならない。すなわち国家理性から自由主義への転換ではなく、(こう言ってよければ) 国家理性の自由主義的<sup>リベラルな</sup>再編成だということである。鎮圧と抑圧ではなく欲望の発露とその誘導が、全面的な支配ではなく部分的調整が新たな編成の原理となるだろう。ここにあるのは個体と集団とを統御する新たな関係性の編成であると言い換えてもよい。自由主義とともに、統治は、支配=被支配という関係のなかにはなく、個体のなかに折り返され、内部化された統治と呼ばれる力の構成の問題へと移動する。19世紀における貧困問題<sup>ポベリズム</sup>の深刻化とともに、開明的な経営者や慈善活動家など、当時の自由主義を信奉した者たちが求めた解決策が、慈善やパトナージュといった、個体化された(そして指導する一されるという非対称的な)関係を基盤とした、道徳<sup>モラル</sup>=精神に働きかける技法、すなわち(未成年状態にあるとされた人びとにたいする)教育であったことはこの点で興味深い<sup>29)</sup>。このことは、この時代における統治技法の焦点がどこに置かれているかを物語っている。それゆえにわれわれはフーコーとともにカントに向かう。

## 6. 啓蒙とは何か

1970年代の後半以降、フーコーは何度かカントの「啓蒙とは何か」という短いテキストを何度か取り上げている。78年に行われた「批判とは何か」という講演、そして83年に行われる「啓蒙とは何か」と題されたふたつの講義がよく知られている<sup>30)</sup>。それぞれに強調点を異にしながらも、ここで共有されているのは、統治理性にたいし、その限界を探る試み(批判)こそが、啓蒙という時代のモメントなのだという立場である。じっさい、啓蒙とは人間の未成年状態からの脱出であるというカントのテーゼに呼応しつつ、フーコーは次のようなカントの言葉をくりかえし引用している。

---

して日本においては中曽根)の前夜に行われたものである。すなわちフーコーのこの仕事もまた、大きな国家とリベラリズムによるその批判という文脈を、絶対王政期にまで立ち戻って再考するという世界的な潮流のもとで再考されるべきであろう。この点については、フーコーの作業と同時期に日本に紹介されつつあった近世ドイツ国制史、絶対王政研究(たとえばブルナー(石井紫郎他訳)『ヨーロッパ——その歴史と精神』岩波書店, 1974や、エストライヒの論文をそのうちに含む、ハルトゥング、フィーアハウス他著(成瀬治編訳)『伝統社会と近代国家』岩波書店, 1982)、またその訳者らによる研究(成瀬治『絶対主義国家と身分制社会』山川出版社, 1988)もそうした観点から参照されるべきであろう。

<sup>29)</sup> この点についてはフーコーの福祉国家論にたいする見直し作業でもあるカステルをはじめとした後続世代の仕事<sup>30)</sup>を参照せよ。R. Castel, *Les Métamorphoses de la question sociale – Une chronique du salariat*, Fayard, Paris, 1995 [カステル(前川真行訳)『社会問題の変容——賃金労働の年代記』ナカニシヤ出版, 2012]。

<sup>30)</sup> まずは78年にソルボンヌで行われた講演「批判とは何か」*« Qu'est-ce que la critique ? », Bulletin de la Société française de philosophie*, 84e année, n° 9, avril - juin 1990 [フーコー(中山元訳)『わたしは花火師です——フーコーは語る』筑摩学芸文庫, 2008])、そしておそらくはいずれも83年に行われたふたつの講義、すなわち、ひとつはコレージュ・ド・フランスにおける『自己と他者の統治』の初回講義(M. Foucault, *Le Gouvernement de soi et des autres – Cours au Collège de France, 1982-1983*, Paris, Gallimard-Le Seuil, 2008)、およびカリフォルニア大学バークレー校で行われた講義「啓蒙とは何か」*« Qu'est ce que les Lumières ? », Dites et Écrits 1954-1988 IV 1980-1988*, Paris, Gallimard, 1994 [フーコー(小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編)『フーコー・コレクション 6 生政治・統治』ちくま学芸文庫, 2006]である。

「もし書物が、みずからの悟性の代わりになってしまえば」、「もし良心の導き手（カントは司牧（*Seelsorger*）という言葉を用いています）が、*Gewissen*（良心）の代わりをしまえば」「そして医者<sup>レ</sup>が、生活<sup>レ</sup>どのように律する [= 身体統治する] かを決めてしまえば、そのような場合「わたしにはもう何の苦勞もないだろう」。だがまさにこれこそが典型的な未成年状態といえるのです<sup>31)</sup>。

ここでナジアンゾスのグレゴリウスが司牧を指して「魂の医者」と述べたことを思い起こしてみてもいいだろう。あるいはエミールを教育するにあたっての主人公ルソーのきわめて両義的な態度もまた思い出してみる必要があるかもしれない。啓蒙が未成年状態からの脱出であるかぎり、われわれはフーコーがここで何を読み取っているかを正確に理解することができる。つまりここで啓蒙は統治理性にたいする理性による批判のプログラムとして提示されると、フーコーとともにひとまずはそう述べることができよう。（エコノミー概念の変容とともに魂の統治もまた変容を被らざるをえなかったのだと言うと、あまりに比喻が過ぎようか。）それは知の「主体」、あるいは権力の「主体」としてわれわれがどのように成立したのかを探る作業であると同時に、われわれの現在の理性の限界を探る作業となり、そしてそのかぎりにおいて、批判と啓蒙、そして主体化と統治が結びつく。なんとという平凡な結論であろうか。だがそれは、ルソーが教導（=統治）の客体としてもはや将来の君主ではなく、エミールという子供を選んだとき、そしてカントが、未成年状態からの脱出を、自己の統治を可能にする技術として定義したとき、自由の可能性が、統治そのもののなかで二重化されることになったということの意味している。そうであれば、平凡さはときに不適切に哲学ないしは思想と呼ばれる抽象的な水準にとどまる場合においてのみ平凡であるに過ぎない。結果として、フーコーは、みずからの時代の条件となっている思考を解きほぐすために、その系譜を過去へと辿る具体的な作業に着手することになる。それはなんと困難な道のりであっただろうか。よく知られているようにその営みは未完のままにとどまっている。フーコーによればそれはいずれにせよ未完のものたらざるをえないものであった。それを「さまよい続ける」と言ってもよく、あるいは「宙づりのまま不安定に生きる」ことであるとも言ってもいいだろう。であればそれを懐疑主義的な態度と呼ぶこともあながち不適切でもあるまい<sup>32)</sup>。

ただし同時に、このとき政治は、きわめて個人的な、そして限りなく倫理と呼ばれる方向へと近づくことになる。彼にとって、それこそが近代という時代の精神であっただろう。

<sup>31)</sup> M. Foucault, *Le gouvernement de soi et des autres*, op. cit., p. 29.

<sup>32)</sup> こうした点については、富永茂樹『理性の使用——ひとはいかにして市民となるのか』みすず書房、2005。また神崎繁『シリーズ・哲学のエッセンス フーコー——他のように考え、そして生きるために』NHK出版、2006。

## 摘要

この論文においては、ミシェル・フーコー（Michel Foucault : 1926-1984）の統治思想（*gouvernementalité*）を検討する。これはもっぱら1978-79年および翌学期のコレージュ・ド・フランスの講義において集中的に検討されたものである。同時代的には、一部の講義がまずはイタリア語に訳されはしたが、この概念が多くの研究者の注目を集めるには、1990年代を待つ必要があった。日本においてはさらに検討が遅れたが、いっぽうで、フーコーのこの研究は、70年代における福祉国家の危機、そして自由主義の再検討という政治的コンテキストを同時代の研究と共有するものであった。本稿においてはこの概念を、こうした同時代および先行する思想史上のコンテキストのもと、彼の初期における狂気および理性の分割の条件という問題意識から、晩年の啓蒙をめぐる問題に至る思想の展開をたどり、そのカント読解との関係に注目しつつ、社会思想上の含意を検討した。